

君に挑戦！ これなんだ？

解答編

その1 とぐろをまいたなぞの物体。これなんだ？

ヒント ひらがなで3文字です。



答え らほつ（螺髪） ※今だと・・・（仏像の髪の毛）

解説 仏像の頭髪です。悟りを開いた仏の頭髪はうずを巻いているとされ、巻貝（「螺・ら」）のような髪（この場合は「ほつ」と読みます）であることから、ひとことで、「らほつ」と呼ばれています。このらほつは、粘土で作られています。仏像をまつお寺が火事になったため、粘土が焼けて土器のようになっています。下には細い穴があいていて、串のような細い棒で、仏像の頭に一つ一つ取り付けたと考えられます。桜区の大字宿のあたりには、1200年前くらいには大きなお寺があったことと、そのお寺が火事があったこと。この小さならほつからは、そんな歴史の断片を知ることができます。

そんな大事な歴史の証人、しかもありがたい仏様の頭を飾る髪の毛！まさか、「う」で始まる3文字のものだなんて、思わなかったよね？

■桜区・宿宮前遺跡（しゅくみやまえいせき）出土

■平安時代

豆知識 古い時代の仏像は、いろいろな素材で作られていました。その素材によって、銅を主成分とする金属でつくる銅像、木を彫ってつくる木像に加えて、粘土でつくる「塑像」（そぞう）、漆を使ってつくる「乾漆像」（かんしつぞう）などと呼ばれています。ここで取り上げたらほつは、塑像で用いられたものです。湿り気のある土の中に埋まると、形がくずれてもとの土にもどってしまいますが、火災などで強い熱を受けると、焼き物と同じ原理で、固く濡れてもくずれないようになります。

その2 親指が鋭くとがった悪魔の手？。これなんだ？

ヒント みんなも3000年早く生まれていれば・・・



答 え 鹿の角 ※今だと・・・鹿の角（どのように使われたのかはこれからの研究が必要です）

解 説 国指定史跡真福寺貝塚から出土した鹿の角です。縄文時代後期の家の跡から見つかりました。真福寺貝塚には、その名のおり貝塚がたくさんつくられており、貝塚のまわりでは、鹿やイノシシなどの骨や、さまざまな魚の骨がみつかっています。普通の遺跡では腐ってなくなってしまうものが、貝の成分のおかげで3000年の時を越えて、今日に伝えられています。これらは、当時の人々の食生活や文化、彼らを取り巻く自然環境と資源管理のありかたを解き明かす大切な材料です。なお、上にあるマッシュルームみたいな形のは、鹿かイノシシの骨の関節のところですよ。鹿かイノシシか…ぜひ、みんなも研究してみてくださいね。

■岩槻区・真福寺貝塚（しんぶくじかいづか）出土

■縄文時代

豆知識

縄文時代の暮らし、というと、毛皮の服を着て、弓ややりを持ってけものや魚をとってくらす、というイメージがありました。調査や研究を積み重ねたことで、そうしたイメージは修正されてきています。けものや魚が大切な食料であったことは間違いではありませんが、くらしを支えた主な食料は植物、中でもドングリやクリなどの木の実であったことがわかってきました。また、彼らが食べていたクリは、野生のものよりもはるかに大粒だったことや、クリの花粉の研究などから、彼らがくらす村の近くに、クリの木を集めた場所がつくられ、しかも陽当たりをよくするために、不要な木を抜きとるなどの管理がされていたことなどがわかってきました。ヤマ（山林）に入って季節の木の実をとってくる、ということももちろんあったはずですが、くらしを支える大事な品目は栽培に近い形で管理していたのです。

このようなことがわかるようになった大きなきっかけは、低地の遺跡の研究が進んだことでした。家がつくられるところは高台が多いのですが、そのすぐそばにはわき水がわいたり小さな川が流れる低地があって、そこには彼らの暮らしを支えた水場があったことがわかってきました。水場には、彼らが保存していた木の実がそのまま残されていたり、いろいろな植物の花粉が残っていたりして、縄文人のくらしを調べたり研究したりする上で、とても大切な場所なのです。

村の近くの低地が大事な場所であることを初めて明らかにしたのは、この真福寺貝塚です。さいたま市内には、ほかにも南鴻沼遺跡（みなみこうぬまいせき、中央区）や大木戸遺跡（おおきどいせき、西区）、寿能泥炭層遺跡（じゅのうでいたんそういせき、大宮区）など、有名な低地の遺跡がたくさんあります。

その3 お皿に謎のマス目。これなんだ？

ヒント ○×遊びではありません。



答え おろし目 ※今だと・・・フードプロセッサーや大根おろし

解説 大きなお皿の内側に付けられたマス目。これは、食材をすりおろすために付けられた溝です。マス目になっているので、いろいろな方向にすることができます。このようなマス目を「おろし目」といいます。また、おろし目が付けられた皿を「おろし皿」といいます。室町時代の中ごろに開発された、画期的な調理アイテムです。

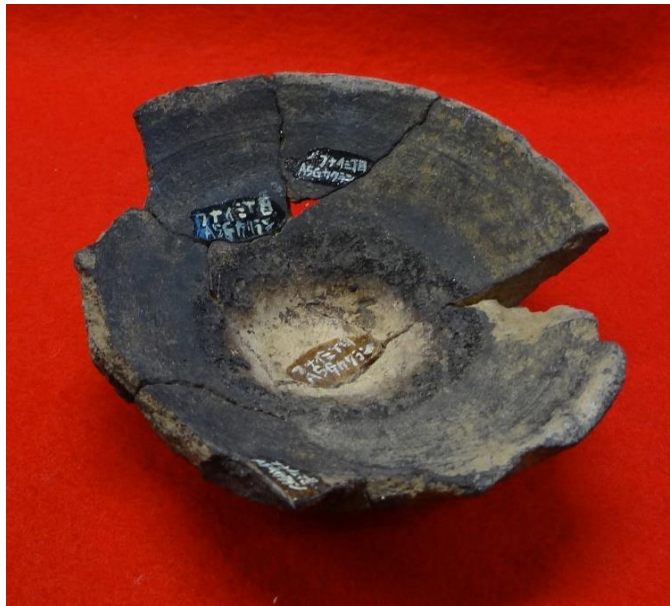
■北区・土呂陣屋跡（とろじんやあと）出土

■室町時代

豆知識 食料を食べやすくしたり、調理しやすくするために、切る、割る、つぶす、すりおろす、粉にする、こねる、などいろいろなことをします。今のくらしで「切る」道具の代表は包丁（ほうちょう）ですが、「うちはフードプロセッサーを使うから包丁は使わない」というおたくもあるかもしれません。くらしの中で使われる道具にはいろいろなものがあり、時代のうつりかわりの中で、新しく発明される道具もあれば、使われなくなっていく道具など、道具にもうつりかわりがありました。長い歴史の中の「中世」（ちゅうせい）と呼ばれた時代は、「すりおろす」と「粉にする」そして「こねる」がさかんになった時代です。その代表は、小麦を粉にして、水を加えて練りあげて、切る、うどんの登場ですが、ここで紹介した「おろし目」付きの皿以外にも、「おろし皿」や「すりばち」などがこの時代に登場します。特に「すりばち」が登場すると、またたく間に中世人の台所に普及し、画期的な発明品だった「おろし目」付き皿は姿を消してしまいます。

その4 黒こげの皿。これなんだ？

ヒント ほたるの光、まどの雪



答 え 灯火皿（とうかざら。「とうみょうざら」ともいいます）

※今だと・・・室内照明

解 説 戦国時代頃まで、あかりの道具は、皿に注いだ油に火をともし、灯火皿が中心でした。油に芯（しん）をひたすと、芯が油を吸い上げます。そして、芯の先に火をつけると、闇に明かりがとまります。芯が吸い上げた油は、全てが燃えるわけではなく、燃え切らなかった油は皿の外側にたれてしまいます。このため、たれた油を受ける皿とセットで使われました。また、何回も使われているうちに、皿は黒ずみ、油の燃えカスもこびりつきました。

■岩槻区・府内三丁目遺跡（ふないさんちょうめいせき）出土

■戦国時代

その5 サビのかたまり。これなんだ？

ヒント 口で使うものです。フォークではありません。



答 え 口琴（こうきん） ※今だと・・・外国では今でもこの楽器を
使っている国があります

解 説 鉄製の楽器、口琴です。口にくわえて音を奏でる楽器です。発掘調査で出土したばかりには、鉄は腐食が進んで、サビと土が周りをびっしりこびりついていて、ところどころ折れたりしていました。サビを丁寧に落とし、サビどめや補強の処理（保存処理・ほぞんしより）をすると、下の写真のようによみがえりました。

■大宮区・氷川神社東遺跡（ひかわじんじゃひがしいせき）出土

■平安時代



その6 円筒形の深い穴。これなんだ？

ヒント 発掘作業中には、えもいわれぬ香りが・・・。



答 え 便所跡 ※今だと・・・トイレ

解 説 戦国時代終わり頃の便所跡と考えられる穴です。発掘中には、えもいわれぬ香りが立ちのぼり、作業する人たち（昭和20～30年代生まれ）を郷愁と苦悩へといざないました。底近くからは、割れていない陶器の皿が1枚出土しました。夜、用を足しに来た人がうっかり落としたあかり、灯火皿かもしれません。

■岩槻区・岩槻城跡（いわつきじょうあと）

■戦国時代

その7 二つ突き出た取っ手つき。これなんだ？

ヒント 今ではタイマー付き



答 え こしき（甑） ※今だと・・・炊飯器

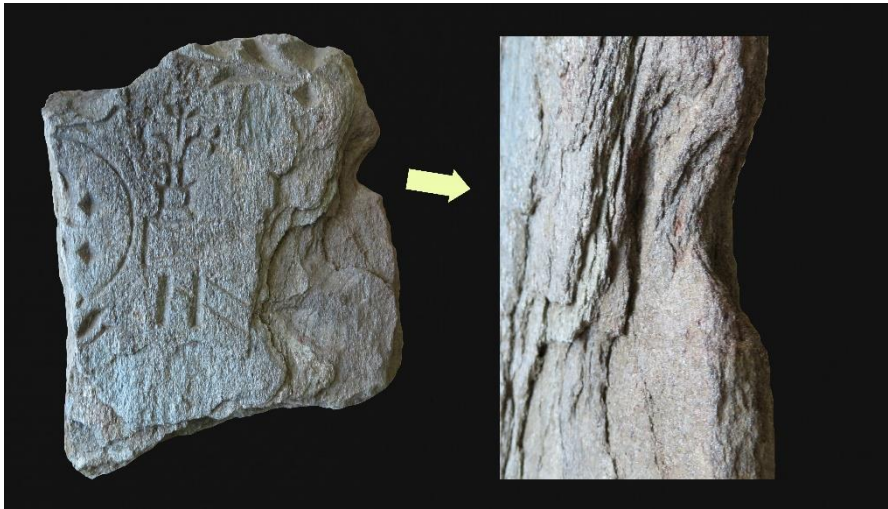
解 説 米をふかす道具です。水を入れたカメ（甕・かめ）に差し入れて使います。底には穴が開いていて、下のカメの中の沸いたお湯から立ちぼる湯気が米をふかしました。カメとこしきのセットは弥生時代から使われていましたが、最初には取っ手はありませんでした。古墳時代の後半にはこのように取っ手が付いたこしきも使われるようになりました。

■中央区・小村田東遺跡（こむらだひがしいせき）

■古墳時代

その8 模様彫られた石のかけら。これなんだ？

ヒント 花瓶に飾った花の絵が・・・

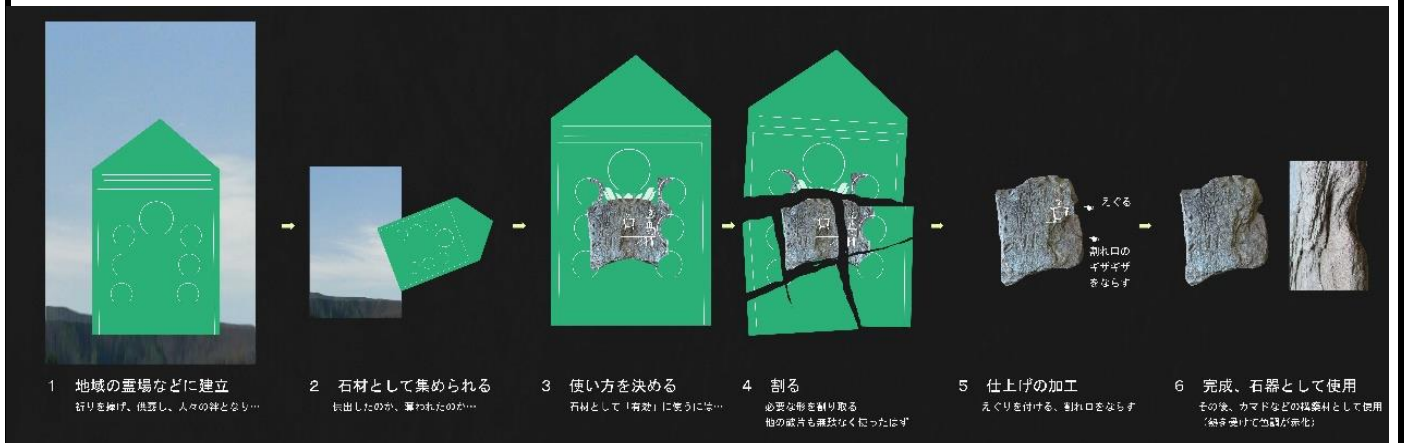


答え 石材に転用された板碑（いたび） ※今だと・・・だいぶ意味は違いますが、
リサイクルのようなものです

解説 鎌倉時代から戦国時代まで、市内でもさかんに造立された板碑（いたび）と呼ばれる石塔（せきとう）の破片です。仏を表す文様が上と左にあり、中央左寄りには、小型の机にのせた花瓶（今の読み方だと「かびん」ですが、この時代には「けびょう」と読みました）などが描かれています。この板碑は、13の仏をまつていることから、「十三仏板碑」（じゅうさんぶついたび）と呼ばれるもので、偶然残ったほかの破片から、1551～1555年頃に村の人々が集まって建立したものであることがわかります。ところが、戦国時代の後半のある時、細かく割られ、石材や石の道具などとして使われました。右側の写真から、道具として加工したくぼみや、火で焼けた変色の様子がわかります。石塔に祈りをささげる心と、それを石材として使用する心。この破片からは、戦国時代にあった二つの心を読み取ることができます。

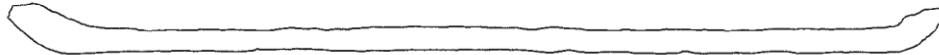
■中央区・今宮2号遺跡（いまみやにごういせき）

■戦国時代



その9 全長3.6メートルの怪しい板。これなんだ？

ヒント 川をくだり、荒波をこえて・・・



※上は真上からの写真、下は断面図

答え 丸木舟（まるきぶね） ※今だと・・・カヌー、ボート、漁船

解説 材木を組み合わせるのではなく、木を丸々使い削って造られたことから、「丸木舟」と呼ばれています。長さ3.6メートル、はば46センチメートルです。木の外側が船の下面に、木の中心は削り取る範囲になるようにして、木を削って造られています。なお、内側＝人が乗るところの表面がやや雑な状態であることから、未完成だと考えられています。

舟のはばが46センチメートルなので、もとの木の直径はそれよりもさらに太かったことがわかります。木の種類を調べてみたところ、クリの木であることもわかりました。3.6メートル以上、まっすくに伸びた幹（みき）があり、その太さは46センチメートル以上もある、クリの太木があったことがわかります。大切に育てられ、太木となったクリの木は、最後は舟を造るための材木として活用されたわけです。

なお、さいたま市は「丸木舟のまち」といってもよいほど、丸木舟が発見されているまちです。これまでに、この舟を含めて23艘（そう。舟を数える単位）が見つかっています。

■中央区・南鴻沼遺跡（みなみこうぬまいせき）

■縄文時代

その10 丸い形に四角い穴。これなんだ？

ヒント よくみると、何やら文字みたいなのが。バームクーヘンではありません



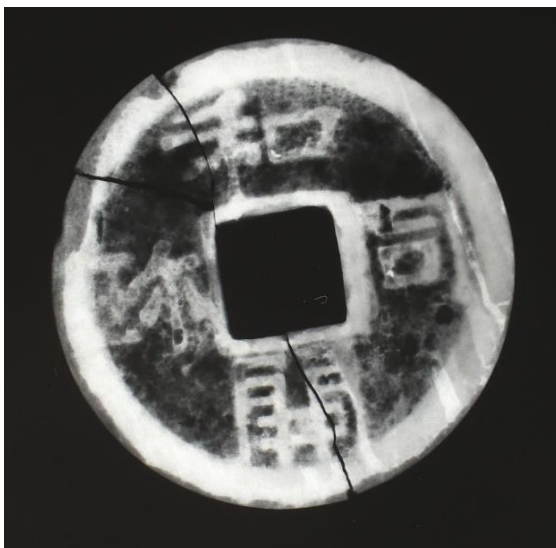
答え 和同開珎（わどうかいちん／わどうかいほう） ※今だと・・・お金

解説 「和同開珎」は、708年に発行されたお金（貨幣・かへい）です。中学校の歴史の教科書にもものっている、わが国の歩みの上でとても大切なお金です。平成31年（令和元年）にさいたま市内の発掘調査で発見されました。全国では6000枚以上が発見されていますが、当時の都である奈良県の近くから見つかっているものがほとんどで、さいたま市では初めての発見、しかも2枚がみつかりました。

上の写真は、発遣されたばかりの写真なので、さびと土が表面についていて、文字を読むのはむつかしかったのですが、レントゲン写真を撮影してみたところ、（時計まわりで）「和」「同」「開」「珎」の文字がくっきりと浮かび上がりました。

■中央区・与野西遺跡（よのにしいせき）

■奈良時代



▲レントゲン写真



▲さいたま市周辺で「和同開珎」が見つかった場所

